



弘津陽介研究員

異の追跡を進めている。
一般的にウイルスは遺伝子レベルで常に変化している。同院ゲノム解析センターの弘津陽介チーフ研究員によると、新型コロナウイルスは

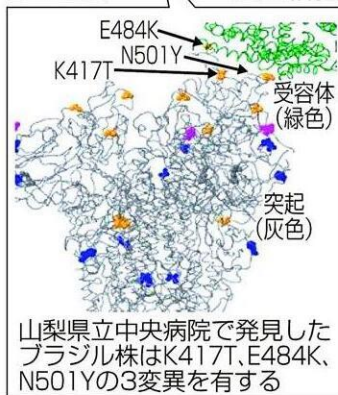
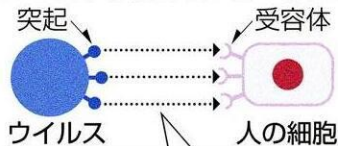
医療最前線 2021年1月の鍵

県立中央病院から

〈222〉

英国や南アフリカ、ブラジルなどで広がる新型コロナウイルスの変異株。山梨県を含む国内でも確認例が相次ぎ、警戒感が高まっている。山梨県立中央病院は独自にウイルスの全ゲノム解析を行う体制を整備し、変異株の早期発見や変

ウイルス感染のメカニズム



体」に直接結合するウイルスの突起部分「スパイクタンパク質」の変異には特に注目が集まる。ウイルスが

変異株 早期発見で抑制へ

遺伝子解析 最新機器を活用

構成される約3万の遺伝子のうち、月に二つほどが変化する。こうした視点で考えると、多くの変異株が生まれては残っているのはその中の一握りだ。
変異はウイルスのあらゆる箇所で行われるが、ヒトの細胞表面にある「受容

体」に直接結合するウイルスの突起部分「スパイクタンパク質」の変異には特に注目が集まる。ウイルスが

体内で産生できれば、感染のリスクを下げることができると説明。変異株に対応したメッセンジャーRNAワクチンの開発、臨床試験も進行中で「感染拡大の抑止に有効」と期待を込める。
同院は変異株への対応を

1Yの3変異を有する）を確認し、国内で初めて学術論文として報告した。弘津研究員は「早期に変異株を発見できれば感染の広がりを押さえ込むことができる」と成果を強調。2013年に最先端のがん治療を目的に開設した、ゲノム解析センターが新型コロナウイルス対応にも生かされているという。

弘津研究員を含め、一部研究者の間では新たな変異株にも関心を寄せている。国内では既に千例を超え、米国でも確認されたタイプ。同院でも14例（4月18日現在）見つかった。今後、国内で主流となる可能性があるという。

収束に向けて変異株への警戒を続ける一方で弘津研究員は「感染防止対策は今までと変わらない」と説明。3密（密閉、密集、密接）の回避やマスクの着用徹底などを呼び掛けている。

2月10日、こうした独自検査でブラジル型（K417T, E484K, N501Y）を発見した。

第2、4木曜日に掲載します